



暁鐘の音

NO. 27

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2023.3.8

教職大学院での学びに触れて

教職実践専攻（教職大学院）

特別教授 栗林 守

本学大学院に関連して、自分のことを振り返ってみます。他大学出身の私は現職教員時代に1994（平成6）年度5～7月の間、産業教育内地留学ということで3か月間本学にお世話になりました。それが縁で翌年の1995（平成7）年度と1996（平成8）年度に本学大学院（修士課程）で学ぶ機会をいただきました。しかし、当時2年目は勤務校に戻って研究の継続と修士論文のまとめを行うというスタイルでした。2年目に学校へ戻ってみると、当時中学校勤務の私は、3年生（受験生）の担任で当然部活動顧問も命ぜられました。プラスして生徒指導主事の仕事も。月に少なくとも1回位は大学に足を運んで、研究の指導を受けました。その頃は部活が終わってから一旦家に戻って食事をした後（幸い地元の学校勤務でした）また学校に戻って研究を行い、日付が変わる頃にかかってくる警備会社からの電話を受けて、仕方なく帰宅準備を始めるといった生活が続きました。間違いが許されない生徒の受験準備と論文提出が重なる年度末は、時間がいくらあっても足りないことを実感する毎日でした。当時は必死で充実した日々と感じていたように思います

が、今思えばかなり過酷な生活を送っていたような気がします。

真面目に取り組んでいる院生の皆さんには「没頭、ひたすら、集中、閃き・・・」といった研究に打ち込むポジティブなキーワードで体中が一杯だと思います。「ぼんやり、ぼうっと、のんびり、気晴らし、ゆったり、たまには・・・」などの言葉は、この時期前者の足を引っ張るようなイメージがあるかもしれません。でも、これも大事だし必要ですよ。院生としての研究の集大成あるいは中間のまとめとしての取組を、頑張ってください。期待します。



高校生から学んだこと

教職実践専攻（教職大学院）

准教授 桜庭 直美

昨年9月、県内の高校で出前講義を行う機会があった。当日は、生徒の興味・関心や進路希望などを基に様々な内容の講義が設けられ、教育分野の私の講義には70名ほどの参加があった。私は、教師の魅力を伝えたいという思いで、「子どもにとっての『魅力ある学び』」というテーマで講義をしたのだが、教師の仕事として目に見える部分である「授業」に関する演習を講義の後半に取り入れた。演習の内容は、私が小学校の教師役となり、算数の授業の導入部において問題点を多く含んだ指導を示し、それについての改善点を考えるというもの。これまで教師側の視点をもったことのない高校生が、どのような改善点を挙げるのか興味があったが、驚いたことに「黒板に書く内容の工夫」のような目に見えて分かることにとどまらず、「前の時間の復習から始める」とよい「教師が解き方を説明してしまい子どもに考えさせていない」「反応しやすい問いかけが必要」「インプットしかできていないので、グループで意見を出し合い考えを深めるとよい」「本当に理解しているか確認する」などのように、指導の問題点を的確

に指摘する意見がいくつも聞かれたのだった。教科指導法や子どもの発達等の理論的な知識のない高校生のこれらの考えは、授業の主体者である子どもの視点から素直に授業を捉えているものではないかと思う。では、なぜ高校生がこのような視点で授業を観ることができたのかを考えてみると、小・中学生のときに、心が躍った授業、自分の考えが深まった授業など、本質的なよい授業に触れてきている自身の経験が大いに影響しているからではないだろうか。

今回の高校生との関わりを通して、秋田県の教員の授業力の高さについて改めて感じ取ることができた。同時に、子どもにとって本物の学びができる質の高い授業を意識し積み重ねることが、「将来は教師になりたい」という意欲とイメージの醸成にもつながるのではないかと思った。教員のなり手不足が問題視されているが、とてとても長い目で見ると、今、小・中学校で子どもたちの心に残る質の高い教育を行うことも解決につながる一つの考え方なのかもしれない。



「なぜ」を求める教員に

秋田県立能代支援学校
教諭 鈴木 迪菜（2019年3月修了）

平成30年度修了の鈴木迪菜と申します。比内支援学校かづの校に3年間勤務し、今年度から能代支援学校で勤務しています。高等部に所属し、明るく賑やかな生徒たちに囲まれて忙しくても楽しい日々を送っています。

今年度、「総合サービス班接客部門」という作業班の主担当になりました。実際にカフェを営業し、接客についての学習をする班です。カフェのスタイルや接客の指導方法など色々と悩みましたが、今年度とはかく「生徒主体のカフェ」を大切にしました。カフェで連想される華やかな部分も、その裏にある地味な作業も全てを生徒が担えるような作業学習にできたらいいな、と思いつながりながら1年間やってきました。

コロナ禍ではありましたが、数回学校外での営業も実施できました。12月に行った時には大学院の武田篤先生が様子を見に来てくださいました。ひどく吹雪いている中、窓からオーディが見えると嬉しさと緊張からソワソワしてしまいました。生徒の接客をニコニコと見守りながらキーマカレーセットとコーヒー、ケーキを注文してくれま

した。商品提供時には学校のカメラだけでなく、地元新聞紙のカメラにも写っていただきました。武田先生の優しいオーラが生徒のとても自然な笑顔を引き出してくれており、すごく良い写真になっていました。帰り際には「ゆる～い雰囲気がいいね！」という褒め言葉をいただき、店舗理念である「お客様が過ごしやすい居場所を作る」が実現できているように感じられてみんなで喜びました。

お世話になった先生に自分の教師としての実践を見ていただけたことがとても嬉しいです。コロナ禍になり、なかなか会う機会も減ってしまっていますが、今後も見たいと思える実践を積み重ねていきたいです。そういえば、大学院には「理論と実践の往還」という言葉がありました。私は実践が先行するタイプですので、実践の中で理論に立ち返る、先日の武田先生の最終講義での言葉を借りれば、「なぜ」を求める教員を今後も目指していきたいと思えます。



事前発表会を終えて

学校マネジメントコース
現職院生 1 年次 小林 正明

事前発表会が終わりました。同じグループのみなさんの発表を聞き、自分の研究との共通点が見つかり、研究仲間として対話する楽しさを感じました。また、それぞれの研究内容と、授業での学びや学校現場の実践との結びつきに気づいている自分に気づくなど、わくわくする発見がたくさんありました。さらに、現職 2 年次院生の方々の取組の量と質に驚き、その情熱に敬意の念を抱いたところです。

私は、今年度 4 月当初から、栗林守先生に、形にならない自分の思いや考えを含め、話をじっくり聴いていただき、あたたかい言葉とまなざしに支えられて恙なく過ごしてきました。研究においては、佐藤修司先生に本当にお世話になりました。私の拙い思いを、研究として表現する方法や方向性を明快に示していただいたことで、「調査協力校の一助になる実践研究に」と邁進することができました。修司先生の言葉のメ

モを基に、自分の行為の意味を一つずつ問い直す作業や、広げすぎた思考を整理する作業を通して、少し前進したり、迷った末に元の道に戻っていたりということを繰り返しました。研究の中間地点、テーマの明確化を図り、まとめに向かう段階では、経営学の臼木智昭先生からもご指導をいただきました 3 人の先生方は、「私がやりたいことは何か」を引き出し、進む道を明るく照らして、希望や達成感を与えてくださいました。粘り強く突き詰める姿勢。オリジナリティを求める姿勢。科学的・論理的な思考を貫く姿勢。研究を通じた先生方とのコミュニケーションからたくさんの学びを得ました。

いつも励ましの言葉を掛けてくださる先生方の下で、現職院生・ストマスのみなさんと一緒に、この十ヶ月間の学びを深めてこられたことに幸せを感じています。

「学校・学級経営の現状と課題」を受講して

学校マネジメントコース
現職院生 1 年次 高橋 華子

本講義は学部卒院生 1 年、6 年一貫コースの学部生というフレッシュな顔ぶれが約半数を占め、現職院生のみで行われる講義とはまた違った空気が醸し出されていた。内容はバラエティーに富んでおり、理論と

歴史、人間関係づくり、経営改善に向けた方策等、一口に「学校」「学級」といっても抱える課題が多岐に渡ることを実感させられた。これらについて先生方、時にはゲストティーチャーから講義していただいた

後に、年代、校種が入り交じったグループで協議を行うことで、自身の実践を振り返ることができた。そして、次の二つについて考えさせられた。

一つ目は、未来の先生の提案や疑問をいかに柔軟に受け止められるかだ。演習でSWOT分析をした際、自分では考えつかないような意見がストマスから出た。一見、突飛とも思われたが、絶対に無理というものでもない。これまでの経験が邪魔をして自分の頭が固くなっていると思わされた瞬間であった。一方で、学校での「当たり前」をいかに分かりやすく、しかも、未来の先生が前向きな気持ちになれるように伝えるかということも求められると感じた。

もう一つは校種による違いだ。本講義では高校籍は私を含めて2名、高校教員の志望者は0名と少々アウェイ感がある中で、他校種から見習うべき点を発見することができた。それと同時に、高校の良さは何かと考えさせられた。この点については、講義の一環で秋田明德館高校を訪問したことがヒントになった。当たり前すぎて無自覚になっていたが、学校の特色打ち出し、特色ある教育を行うことができるのが高校の良さであると思う。今思えば、グループ協議の際にもっとその点を発信すればよかったと反省している。本講義で得た学びと、少し取り戻すことができた若い感性を、学校現場で生かしていきたい。

「教育実践力の向上と秋田型協同研究システム」を受講して

学校マネジメントコース 現職院生1年次 渡部 和朝

高い授業力が評価されている本県であるが、質の高い校内研修に向けた取組についてはまだ検討の余地が多い。このような現状を打破すべく、教師一人ひとりの実践力の向上とそれを可能にするための協同研究のシステムについて、学部卒院生と現職院生が協議を重ねながらよりよい方向性を見いだすことが本講座の目的である。

講義の中心は「会話やシート分析法などの質的研究」に関することであった。子どもや教師の発話や行為を精緻に捉え、意味を解釈し再構成することは、研究授業を参観する上で常に心に留めて置くべきことであり、その意味からも貴重な学びとなった。また、附属小学校の授業参観や校内研修会に参加し、理論と実践の往還ができたこと

も、専門性を高める上で有意義だったと感じている。さらに、講義の中で先生方が熱く語っていた「反省的実践家としての教師の在り方」や「行為の中の省察(reflection-in-action)」については特に印象に残っており、折を見て思い出すことになるものと考えている。

この講座にも見られるように、教職大学院の大きな特徴は「世代を超えた学び」ではないだろうか。率直に意見を交わすことを通して、経験に基づく優れた実践知が学部卒院生に継承されている。また現職院生は、若い世代の考えを知り今後の進むべき道を自覚する機会となっており、このことは私自身が得た大きな財産の一つである。様々な形で学びを通し、自分の人生を深く考

える「キャリア・デザイン」の視点をもち得ることができた。学んだ理論や気づきが、節目節目での大きな支えとなるであろう。終わりになるが、次代を担う若い力とともに明日の秋田県教育について語り合えたこ

と、そしてこのような機会を与えてくださった全ての人に感謝したい。

行事一覧（2023年1月～2月）

1月24日（火） 研究成果事前発表会

2月 6日（月） 実践研究報告書 提出

17日（金）・18日（土）

NITS・秋田大学教職大学院コラボ研修

第14回あきたの教師力高度化フォーラム

今後の行事予定

2023年

3月14日（火）実践研究報告書提出期限

23日（木）卒業式